

# 英 語 科

肥 沼 則 明  
蒔 田 守  
久保野 り え  
植 野 伸 子



# 確かな英語力を身につける学習者の育成

## 1. はじめに

本校英語科は、その前身である東京高等師範学校附属中学校時代の明治43(1910)年には既に、英語を英語のまま理解するには音声中心の訓練から始めることや、英語の授業をできる限り英語で行うこと等を、現在の指導計画にあたる『教授細目』(東京高等師範学校附属中学校, 1910)に定めて授業を行っていた。

初級にては聴方を以て中心とし、最初は教材を先づ聴方にて授け、次に之を言方にて練習し、次に之を読方にて練習し、最後に之を書方にて練習することとす。(p.224)

外国語の教授時間には生徒をして其の外国語の行はるゝ社會中にある如き感を抱かしむるを可とす。例へば、教場管理に関する事項を談話する場合、既に授けたる語句を用ひて説明し得る場合、國語を用ひずとも絵画、身振等の助をかり英語にて説明しうべき場合、及び復習、練習に用ふる問答等は成るべく英語のみを用ふ、されど、例へば事物の名称の如き英語を用ひては徒らに長き説明を要するもの、並びに文法上の説明の如き正確を要するものには國語を用ふることとす。(p.237)

さらに、大正12(1923)年にH.E.パーマーが本校を「オーラル・メソッド」の実践校としてからは、同指導法に則った形で「聞くこと」「話すこと」を中心としたその指導法を脈々と受け継いできた。もちろん、その伝統に甘んじることなく、時代の変化を見定めながら、目の前にいる生徒の実態に合った指導法を確立すべく新たな取り組みもしてきている。そして、現場の指導者として本当に必要なことは何かということに重点を置いた研究を進め、その成果を以下のように研究協議会で発表してきた。

- 平成8～11年度…「育てたい生徒像」を設定し、「聞くこと」「話すこと」を中心とした創造的な言語活動の3年間の指導計画を作成した。
- 平成12～15年度…「自立した学習者」を育てるための4つの要素を相補関係を持たせて指導することの重要性とその具体的指導内容を提案した。
- 平成16～18年度…入門期指導のあり方と具体的な指導内容を提案した。
- 平成19年度……小中連携と中高連携を意識した中学校の具体的指導事項を提案した。
- 平成20～24年度…「新学習指導要領に対応した授業作りの工夫」をテーマに、技能統合的な活動の例、カリキュラム編成上の課題、新しい教科書への対応、小中連携を考えた入門期指導の実践例などを提案した。
- 平成25年度……「意味を伝える音声指導」をテーマに、授業における様々な工夫や具体的な指導内容を提案した。
- 平成26年度……「『読める』生徒を育成する系統的指導」をテーマに、生徒が最終的に長文をスラスラと読めるようになるための指導内容を提案した。

このように、本校英語科は時代の要請による事柄はもちろんのこと、英語教育において恒久的に追究されるべき内容も研究してきた。そして、英語科教員全員が最終的に「育てたい生徒像」に関して共通理解をもち、誰が、いつ、どの学年の、どのクラスを担当しようとも、生徒が戸惑わないような指導を心がけながら、日々の学習指導を行ってきている。

## 2. テーマ設定の理由と基本的な考え

次期学習指導要領が告示されるまであとわずかとなった（従来より早く平成28年度末に告示される見通しであるという）（日本教育新聞、2013年11月4日）。文部科学省のサイトや新聞等の報道によれば、小学校高学年において英語が「教科」とされることや、現行の高等学校に続いて中学校でも「授業は英語で行う」ことが求められることなど、中学校の英語科をめぐる状況が大きく変化することが確実視されている（文部科学省、2013）。一方、現行学習指導要領（平成20年3月告示）により、正式に小学校で外国語活動を経験した児童を受け入れるようになって数年が経ち、諸々のメリット、デメリットが全国共通の事柄として共有されるようになった。特に後者については、定着が求められない小学校の外国語活動を経験してきた生徒は、それ以前の生徒に比べて中学校の英語学習に必要な家庭学習の習慣が身につけにくくなっているという声が多く聞かれ、小学校の外国語活動の成果を中学校の英語学習指導で十分に生かし切れていない実態が見えてきている。そこで本校英語科では、改めて生徒に確かな英語力を身につけさせるにはどうしたらいいかということの研究し、その具体策を提案することにした。

まず、生徒に確かな英語力を身につけさせるには、次の2点が大切であると考えられる。

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"><li>① 楽しく、わかりやすく、力をつく授業を行う。</li><li>② 主体的に学習する生徒を育てる指導を行う。</li></ul> |
|--|

このうち、①については議論すべき内容があまりにも多岐にわたるので、ここでは割愛し、今回の議論の対象を②に絞ることとする。すなわち、授業以外の部分も含めて、生徒が主体的（自主的、意欲的、能動的）に学習するようになるためにはどのような指導が必要なのかということを考えていきたい。それは、先述のように、「以前より家庭学習の習慣が身に付きにくくなった」という指摘がある一方で、実は「どのように指導したら生徒が自主的に勉強するようになるのか？」という問いに対する具体的方策を考えることが、以前から私たち英語科教師の共通の課題でもあったからでもある。それを避けて通っては、いくら楽しく、わかりやすく、力をつく授業を行っても、生徒に確かな英語力は身につかないであろうというのが今回の研究の出発点である。

では、具体的には何をどのように指導していったら、「確かな英語力を身につける」生徒を育てることができるのであろうか。それについてはいくつかの指導事項が考えられるが、まずそれらを3つの指導の視点に分けてみた。

### ア) 学習習慣をつけさせる

家庭学習を行う習慣をつけることが基礎・基本を身につける第一優先事項である。英語は「技能」であることも考えると、授業で学んだことを家庭で復習しなければ学んだことが定着せず、「できない」→「つまらない」→「勉強しない」の負のスパイラルに陥ってしまう。そうならないための指導が、特に初期段階で重要である。

### イ) 振り返り学習をさせる

課題や発表などを自分の力で振り返ることで、より確かな力を身につけることが次の段階として必要である。それは、教師に与えられることを受け身の姿勢で学んでいるうちは真の力は身につかないからである。学習したことや活動したことを、改めて自分でしっかりと振り返って修正することで、より確かな英語力が身につくのである。

#### ウ)「オプション学習」を推奨する

学習の最終目標は、自分の興味・関心に応じて一歩進んだ学習をする生徒になることである。それは、英語学習に限らず、ある教科や分野で高い学力を身につけている人は、学校で学んだことに加えて、自分の好きな、ややレベルの高い内容を、自分の意志で主体的に学んだ人だからである。したがって、そのような学習をするように刺激を与えることが大切である。もちろん、そのためには教師の段階的な働きかけや指導が必要である。

では、以下に上記の3つの視点ごとの具体的な指導例を紹介する。

### 3. 指導の方針と具体的な指導例

#### (1) 学習習慣をつけさせる指導

前述のように、生徒が英語力をつけられるかどうかは、授業の善し悪しを別にすれば、学習習慣の有無が大きく関わっていることは言うまでもない。そのために、教員がどのような指導を行っているかにあらためて焦点をあててみる。

#### ① 主体者意識を持たせる指導

##### ア) 授業びらきにおける指導

授業びらきは、これからの約束事を生徒に伝える重要な機会である。授業への心構えや持ち物に関する指導をしたり、今後の学習への希望を持たせたりすると同時に、自分の主体的な取り組みがいかに重要であるかを、まずここで伝えておく。次のような点が、主体者意識を持たせるために伝える指導事項である。

- ・どんな学習でもそうだが、外国語は特に、本人のやる気がなければマスターできない。なによりも自分がやる気で取り組む。
- ・英語は実技教科であるので、スポーツや楽器の演奏同様に、「わかった」だけではだめで、その後実際にできるようになるまで練習することが必要である。
- ・自分は英語ができるようになって何をしたいのか、自分はどうな姿になりたいのか、目標をイメージして、ノート最初のページや見返し（または配付されたハンドアウト）に書いてみる。
- ・限られた授業時間内でうまくなろうと思ったら、他の人が答えている時も自分が指名されているつもりで、口パクで練習するなど、授業時間を全部生かすようにする。
- ・わずか週に4回、学校で授業を受けているだけでは、英語ができるようにはならない。うまくなるためには、授業外（家庭）での練習は不可欠である。

##### イ) 主体者意識を継続させる指導

前述の指導項目はすべて重要な内容であるが、始めに1回言って済むものでもない。折りに触れて刺激を与え、目標を新たにさせ、学習意欲を維持させたい。実技テストを含む定期テストもその刺激であるし、授業内外での教師の励まし、称賛も刺激になりうるであろう。また、学校外でも実際に英語を使う機会があった生徒は学習意欲が向上する。そこで、学校でも次のように、英語を使う機会を設けるようにしている。

- ・ALT と自由に話す場 “English Room” を開設する。
  - ・英語圏に限らず、海外から本校への視察の方が有る場合に、挨拶を受けたり、案内をしたりするなど、交流の場を持つ。
- これらの発展的な取り組みのうち、English Room については、後の節で詳述する。

② 家庭学習の指導

家庭学習が重要とすれば、生徒にはどのように取り組めばよいかを指導しなくてはならない。本校では、次のように家庭学習を指導している。

ア) ノート指導以前の家庭学習：「家庭学習の記録」

本校では、言語習得の自然な順序に従って、基本的に「聞くこと」「話すこと」を「読むこと」「書くこと」に先行して行っている。入学第1週目から、実物を用いて自然な状況を設定し、“My bag.” “Is that your bag?” “Yes, it is. It's my bag.” などと英語を状況に合う「生きたことば」として用いながら口頭練習しているが、まだ文を読んだり書いたりはしない。その時期には本校では、ICレコーダーを授業中に配り、生徒は自分のSDカード（一括購入し、始めに配付）に授業の一部（教師が指定）を録音して持ち帰る。

家庭学習の際、生徒は授業中に配られたハンドアウトと録音の音声を頼りに、その日に学習した内容を思い出し、口に出して練習をする。練習した内容は、「家庭学習の記録」と題した用紙（図1）に、学習内容やコメントを書いて週に一度提出する。授業中に机間巡視して記録の様子を見て回ることもある。

**英語科家庭学習の記録** No. ( 3 )

組 番 氏名 \_\_\_\_\_ 毎日英語を口にしよう！ 耳に入れよう！ 週末の復習を工夫しよう！

月/日	曜日	練習内容(ハンドアウトNo.など) 今日の復習 今までの復習	感想	できるようになったこと、気づいたこと、工夫したこと、疑問点、今後の課題等	基礎 1	その他英語に触れたこと を具体的に記録しよう	ご家族 確認印
4/28	月	13,14,16,17 9,12,15	アルファベットの音は、息だけで言うP, D, T, Y, K とb, d, g の音は息が通るものがあり、それぞれの発音に注意しながら練習した。		○	馬のアナウンス	○
4/29	火	5,6,8,13	たし算やひき算で答えを考えながら、それと同時に数字も英語で答えるのが楽しかった。		○	英語のCDを聴いた	○
4/30	水	18,19,20 1,2,3,4	大文字から小文字になる過程は、省略や筆書きをヒントに順を追って考えると、意外とわかりやすかった。50年の長(Cの)の形の形を覚えていく練習をした。		○	英語の音楽を聴いた	○
5/1	木	21,22,23,24 5,6,7,8	大文字から小文字へ変化する「B, D, P, Q, R」を覚えた。予想でかえらないうえに、また、冷感庫の英語はなかなか自然に口が動かないと思っていた。		○	アナウンス看板	○
5/2	金	25,26,27 9,10,11	冷蔵庫の英語がたどるようになるようになった。この音読みは色に開いておもしろいので、楽しい。		○	馬のアナウンス	○
5/3	土	12,19,23,25,26 (復習と答え)	物が相手のものか、他の人のものかを聞く質問し、ちがうか合っているかの答え、正しい人の名前を言う練習をセットした。		○	英語のニュースを聴いた	○
5/4	日	5,8,13,20,24,27 (アルファベットの音と名前)	アルファベットの音読みで「A NEW ABC SONG」を歌ってみた。「I'm」のちがいが難しい。V.と音読みをするのがなかなかよかったです。		○	英語のニュースを聴いた	○

今週のまとめ  
アルファベットを書く練習や音読みで言う練習をたくさんやった。上達できるようにがんばりたい。

ご家族感想  
週末(土曜)に復習(お母さん)とあわせて、アルファベットを練習して、お母さんが録音した音声を聴いた。

★ご家族の方へ… 復習に重点を置いた毎日の家庭学習は、英語の場合特に重要です。この時期にぜひその習慣をつけさせたいと思います。ご家族の方には、お子様の練習を見守っていただき、その様子を「ご家族感想」欄にご記入いただければ幸いです。

図1 中学1年の初期に行う家庭学習の記録

## イ) ノート指導以降の家庭学習

文字の書き方、単語の写し方を学んだ後は、ノートに学習の跡を残していくことができる。ノートには日付を必ず書かせ、口頭練習した内容及び、単語・文を書く練習を行わせる。

単語や文の練習は、闇雲に多い回数を書くのではなく、テスト形式で行うことを奨励する。そのために、テストの問題文とするべく教科書本文の訳を学習後に渡す。その訳文をもとにして正確に本文を英語で書けるようにする、というのが年間を通しての課題である。間違いは必ず赤ペンで直すこと、自分がどんな間違いをしたのかがわかるようにすること、は他教科にも通じる指導事項である。

ノートへの練習方法は、「本文が日本語を見て書けるようになったか、テスト形式で行うように」という指示だけなので、何をどこに何回書く、というような細かい指定はない。何度練習すればできるようになるのかは、個々の生徒に任せている。このように、どれだけ練習すればよいかを、生徒個人に委ねていることは、できるようになりたいのは自分なのだ、という意識を持たせたいことともつながっている。

なお、「家庭学習」というと、単語・文の練習や板書をイメージすることが多いと思われるが、音読など声を出す復習を家庭学習の中で継続させることも重要である。通常の授業で、斉読だけでなく、忘れずに個人読みを入れる、またただ読ませるだけでなく、良かった点を具体的にほめることを教師が継続することで、家庭での音読練習を後押ししたい。さらに、本校では学期に1度を目安に音読の実技テストを行なっているが、そのような場を設けることは、声を出す復習の励みとなるであろう。

## ウ) 学習方法を学ばせる

学習の主体者である意識があるならば、どう学習するのがよいのかを自分で模索するはずである。教師は当然ガイドを示すべきであるが、生徒にはそれにとどまらずにより良い学習方法を試してほしい。それには、友人同士でお互いの学習の工夫を紹介し合ったり、関連する情報を収集したりすることがとてもよい刺激になる。本校でよく行うのは、長期休暇明けに自主学習に用いたノートを見せながら学習の工夫を紹介することである。これはペアやグループで行ってもよいし、実物提示装置などを用いて前で発表させてもよい。自分一人では思いつかない様々な工夫に触れることができ、生徒がお互いに学び合える良い機会となっている。

この実践はクラスや学年を越えても行うことができる。後述する「テストノート」では、日頃の取り組みをふり返ってコメントさせているが、それを集約したハンドアウトを作って配付するだけでよい。一例として「できる人の7つの習慣」とタイトルをつけて作成したハンドアウトを示す(図2)。ちなみにこの時の7項目は以下の通りである。

- ・ Plan → Do → See のサイクルができている
- ・ 基礎英語は「毎日」「2回」聴いている
- ・ 基礎英語放送前に、本文を黙読／音読している
- ・ ノート学習時に、文字を基準線から浮かせず書くことを徹底している
- ・ 問題集を授業進度に合わせて着実に進めている

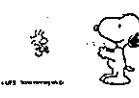
- ・毎日の学習記録ノートを時間制限を設けてテスト形式で行い、正確に○つけまでしている
- ・授業中に大事だと思ったことはすぐに教科書やノートにメモしている

このハンドアウトの配付後、これを自分の学習に取り入れたり、参考にして自分のやり方を見直したりした生徒が多くいたことがその後のテストノートから窺えた。

また今年の中1では、「英語の学習法についての本を何か1冊選んで読む」という宿題が夏休みに出された。こうした本を読むことで、英語学習に意識的になり、また新鮮な気持ちで休み明けのスタートを切ることをねらいとしている。

## できる人の7つの習慣 No. 280

### テストノートに先輩たちが書いたコメントが物語る！



- ① Plan→Do→Seeのサイクルができています
 

先を見通して早めに「計画を立てる」→強い意志を持って「実行する」→自分の取り組みを「振り返る」→必要なら修正を加え新たに「計画を立てる」→強い意志を持って…の学習サイクルが作れている人は、どんな勉強のしかたに工夫をこらして力を伸ばしています。友達といろんなアイデアの情報交換をして、おもしろそうなのは自分の学習にも取り入れてみましょう♪
- ② 基礎英語は「毎日」「2回」聴いている
 

「あの人はどうしてあんなにListeningがよくできるんだろう…？」と思って尋ねてみたら、返ってきた答えは「基礎英語は毎日2回聴いてるよ…!!!」毎日聴くのは当たり前！できる人は朝晩2回も聴いている！ネットの「らじる★らじる」や1週連続の基礎英語サイトも賢く使いましょ。2回目はテキストなしで聴くなどハードルを上げるのも手です。
- ③ 基礎英語放送前に、本文を黙読／音読している
 

いきなり15分ですべてを理解しようとするのではなく、事前に本文だけでも目を通しておくと、どこがポイントか、どこを注意して聴いたらいいかわかって、放送中の15分の効率が上がります。前日までのレッスンを復習するのも、良い復習⇒次の良いスタートになりますね。
- ④ ノート学習時に、文字を基準線から浮かせずに書くことを徹底している
 

文字の形や高さ、書く位置は普段から意識していないと、大あわてのテスト中に急ぎつつきちんと書くことはできません。意識しなくてもきちんとした文字が正しい位置に正しい形で書けるように、毎日がトレーニングのつもりで書きましょ。
- ⑤ 問題集を授業進度に合わせて着実に進めている
 

問題集をためてしまう意気はもうよく知っていますね！問題集のボリュームはこれまで同様。学習指導要領改訂により、昨年度から新・検定教科書の分量がずしっと増えたのは、去年一年間で極限済み、ということはお…。
- ⑥ 毎日の学習記録ノートを時間制限を設けてテスト形式で行い、正確に○つけまでしている
 

テストノートに何人もの人が「時間が足りなかった」「正確に、かつ素早く解けるようになりたい」と書いています。それなら普段から時間制限の負荷を自分に課して、少しでもテストの緊張感に近づけちゃえ！○つけも必ずやる習慣をつけましょ。自分の取り組みを客観的に振り返るいいチャンスにもなりますよ☆
- ⑦ 授業中に大事だと思ったことはすぐに教科書やノートにメモしている
 

先達のテストノートには「授業中メモをとっていたのがとても役に立った！」と多くの人が書いていました。「え？メモ程度で？」と思うかもしれませんが、メモをとるということは、意識も高まっている＝脳がしっかり働いているということ。記憶にも残るし、「復習しよう、復習しなくちゃ！」という気持ちにもなりやすい、というコメントもありました。理科で見たビデオでメモの大切さはよく知っていますね！




図2 学習方法に関する生徒達の工夫を集約したハンドアウト



## エ) ラジオ講座『基礎英語』の聴取

NHK ラジオ講座『基礎英語』は、毎日継続して聞くことのできる貴重な初學者向けの音声教材として、聴取を奨励し定期テストにも出題している。その年の番組によって、中学生の授業進度とは大きく違うこともあり、「基礎英語でやったから大丈夫」と言えるような扱いは無論ない。しかし、中学生の学習と大きく離れない内容で、ネイティブスピーカーの発音やリズムを継続的に耳に入れる意味は大きい。また他の番組への第一歩になるかとの期待もあり、扱い続けている。

## (2) 振り返り学習をさせる指導

### ① 授業内の音読を振り返らせる

教科書を使った日常的な授業に音読は欠かせない。教科書のテキストを音声化させると、生徒が内容を適切に理解しているかどうかよく分かる。音読は内容理解を音声によって表現するものであるから、生徒が内容を理解できないときや、音声表現がつかないときには、教師による範読や教科書準拠 CD の音声と齟齬が生じることになる。反対にモデルリーディングと同じように読んでいると感じられる時には、理解にも表現にも大きな誤りはないと考えられる。一方、途中で読み違えたり、同じタイミングで終われなかったりしたときには、生徒はどこかに問題を抱えている。その問題を解決したいのだが、自分の発した音声はすぐに消えてしまうので、その原因を自力で追求したくてもあきらめるしかなく、問題は先送りされることになる。しかし、音読時に各自の音声を録音することによって、生徒は自分の音読に向き合うことができるようになる。

本校では約 20 年前からポータブルカセットテープレコーダーを活用し、発表時に各自の音声を録音させることにより、この「消えゆく音声」の問題に取り組んできた。加えて平成 25 年度からは IC レコーダーを使用し、より簡便に録音・再生できるようになったので、日常的にも IC レコーダーで音読を録音し、振り返り活動に活用する試みを行っている。

具体的には、本文の内容理解や新語指導が済み、範読を聞いて繰り返す時に録音させ、その場で各自に聞かせ自らの問題点を探らせる。Buzz Reading (個人練習) に入る前に、範読と比較して上手に読めていない部分を自ら見つけ、教科書に集中的に練習すべき箇所を書き込ませることによって、練習に各自の目的や目標を持たせることができる。さらにその音声を自宅に持ち帰り、復習時に活用することにより、授業内での練習と家庭での復習を結びつけることができるようになった。カセットテープの時代には「頭出し」が必要であったが、IC レコーダーではトラックを新たにすることで、ピンポイントで自分の苦手な箇所を練習できる。

また、前時の復習では、オーバーラップ読みを録音させると、復習してもなお身につけていないリズムや音声がはっきりと自覚できる。このように毎回の授業過程で振り返らせることにより、主体的な学びを促進することが可能となる。

### ② 発表活動を振り返らせる

スピーチやチャット、音読などの発表活動を行う時には、練習で上達させ、本番でベストの発表をし、さらにきちんと振り返りを行わせ、足下を固め次の目標に向かっ

て歩むことができれば、生徒は確かな英語力を身につけることができるようになる。具体的な手順と目的は以下の通りである。(図3)

#### ア) 発表時の音声を録音する

振り返りを正確に行うためには発表時の音声は不可欠である。緊張して録音ボタンを押し間違えることもあるので、控えている生徒に一人前の生徒の音を録音してもらう。

また、教師は教卓にマイクを立ててビデオカメラで音声と映像を記録する。教師が録画することによって、後にクラスのベストパフォーマンスをみんなで振り返ることや、他クラスの発表に学ぶことが可能になる。

#### イ) 録音した音声を聞き、発表を忠実に書き起こし、コメントする

いいよみや「あっ」といった日本語なども含めて、できるだけ忠実に書き起こす。自分の発した英語であっても、想像していた音声とあまりに異なっていて心折れることもあるが、あくまで「今の自分の英語」を見つめるために、忠実に書き起こすことに徹する必要がある。

書き起こしながら感じた様々なことをコメントとして書き加えていく。良くできていると思うこと(構成、表現、発音など)は青で、改善が必要だと思うところは赤で書く。コメントの色や量がバランス良く書けるように指導したい。客観性と共に自己有能感や達成感を味わうことも英語を好きになり確かな力をつけるためには大切なことだ。

#### ウ) 観点別に自己評価する

ハンドアウトに今回の発表に関する準備や練習なども含めた観点を指定し、3段階または5段階で自己評価させる。自分の気になった点だけにとらわれがちだが、練習段階も含めて広い視野から大まかに評価することは、生徒に新しい視点を提供することにもつながる有効な手段となる。

また、次の活動に備えて全体を見渡すという役割も果たしている。特に次回への目標設定や決意の部分を作り上げる大切な要素となっている。

#### エ) 自分にとって最も素晴らしいと思える発表者を3名選び、その理由を書く

ベストパーフォーマーを自分の目と耳で選ぶことは、自分が何を大切にして発表活動を行なっているかを表明することに等しい。また、録音した自分の音声を聞いて自らの課題が明確になっている生徒にとっては、その課題をクリアしていると感じられる級友の素晴らしい点を具体的に指摘することは、自己評価と同様に次回への努力目標設定へとつながる大切な段階となる。

この課題を意味あるものとするために、聴衆は級友の発表をきちんと聞かねばならない。良い聴衆は耳で聞くだけでなく、発表者を見つめ、うなずき、微笑むことで、発表者の最大値を引き出してくれる。このように互いに支え合い、学び合う学習者は、主体的学習者へと育っていく。

#### オ) 今回の感想、次回への思い、当面の目標を明らかにする

今回の感想では自分の発表に対する準備や練習への熱心さが実際の発表にどのよ

うな影響を与えたかを具体的に記述する生徒が多い。従って、うまくいかなかった原因だけでなく勝因も書かれることが多い。勝因が書かれる場合には、「前回の発表で、…だったから、今回は…を工夫したことが良かったと思う」というように、前回の課題に対して自分がどのように対応し、その成果がどのように発揮されたかが書かれることがある。振り返り活動の最も大切にしたい部分である。

また、練習時に思い描いていた成功イメージに達することができなかった場合には、その原因を日頃の授業態度や家庭学習に求めたり、今回の練習姿勢に問題点を発見したり、全く新たな段階の課題を自分に課してみたり、反応は様々である。しかし、重要なことは生徒自身が試行錯誤し、その中から課題を設定・追求し、自らの目標に向かって練習し続けることだと考えている。もし、設定した課題が本人の問題解決に結びつかなければ、新たな課題を設定すれば良い。

No.335

**My Favorite Things / Things To Do**  
**発表のまとめと今後の課題**

この日に書いた  
 発表文を見て 先生は「いいね」と言った ( )

1. 録音したテープを聞き、実際に読んだ英文を書き添えて、次の課題をやろう。  
 ・内容を授業上で自分で工夫した点、上手に話せた点等をペンで書いてみよう。  
 ・よりよい話し方や聞き方の内容に気付いた点をペンで書いてみよう。

(Fill) スピーチ部門 5分以内 5分以内

Hello, Mr. MacRae. My name is \_\_\_\_\_  
 I like (A) to play tennis. 2分以内 2分以内  
 I'm a member of the tennis club. 2分以内 2分以内  
 And, I like listening to music and watching \_\_\_\_\_  
 My favorite music is "Mikazuki."  
 You should be \_\_\_\_\_  
 Thank you!

(2) Q&A部門 ※マクレー先生の質問と自分の答  
 Q: Sorry, what is your favorite music?  
 A: My favorite music is Mikazuki.  
 Q: What kind of music is that?  
 A: It's \_\_\_\_\_  
 Q: What else would you like?  
 A: I like \_\_\_\_\_  
 Q: What kind of music is that?  
 A: Thank you.

2. マクレー先生からいただいた評価カードを貼ろう。  
**Evaluation & Comment by Mr. MacRae**

No.: \_\_\_\_\_ Name: (Family) \_\_\_\_\_ (Fill)

① Content	5	④	3	2	1	Total	Comments: (if any)
② English	5	④	3	2	1	4.5	
③ Delivery	5	④	3	2	1	4	
④ Answers	5	④	3	2	1		

5: Very good 4: Good 3: Fair 2: Poor 1: ?

3. 原稿作成についてA/B/Cで自己評価してみよう。  
 幾分か内容の原稿が書けた  正しい表現の用法で原稿が書けた

4. 自分の発表をA/B/Cで自己評価してみよう。  
 十分な声量で話している  きちんと発音できている (ポイントの発音OK)  
 観客の目が集まっている  文のイントネーション・リズムが素晴らしい  
 内容に合った適切な感情表現や演出ができていた  
 質問に適切に答えることができた  さらに情報を付け加えることができた

5. 今回のスピーチ発表とQ&A活動でわかった自分の課題をまとめよう。

6. 神岡の発表の中で上手な発表をしていたと感じた3人について、その人のどんな点が褒められているのかを分析してまとめてみよう。

① ( ) → 何よりも面白い。スピーチ内容がQ&Aで手強い。しかも、質問に答える時に、自分の得意な話題を話していた。

② ( ) → 声の出し方が良かった。声の抑揚が良かった。直感的に、聞き手が興味を持っていた。

③ ( ) → 何よりも、質問に答える時に、自分の得意な話題を話していた。

8年 組 ( )

図3 発表活動の振り返りシート

③ テストノートで定期考査を振り返らせる

生徒は定期テストの平均点や友だちとの点数比べに熱心だが、自分の誤りや理解できない点には関心を示さない。これが定期テストを有効に活用して学習方法等について考えさせるテストノートが生まれた背景だ。

自らの至らない点に気付き、正確に表現する力を養わせるためにテストノートを作成させる。定期テストの解答だけでなく、普段の勉強方法やテストへの取り組みなども振り返るよい機会となろう。

ア) 作問と採点の留意点

a) 問題形式や内容を事前に予告し、テスト対策アドバイスを指示する

定期テストの主たる目的は生徒に順位を付けて振り分けることではなく、テストを機に生徒が自ら日頃の学習をふり返り補強することにある。そもそも何が問われるのかわからないテストでは対策が立てられないので、生徒には事前に出題形式や内容、そして試験対策のアドバイスも与え、生徒の準備を支援することが肝要だ。

b) 評価観点を明確にした作問と採点

一つの大問の中にいろいろな観点の問題が入っているいわゆる「総合問題」は避け、観点別学習状況の評価項目を念頭に置き「内容の聞き取り」「単語の綴りに関する知識」「自由作文」など大問の評価観点を明確にして作問を行う。採点時には、評価したい項目を重視して採点する。例えば「自由作文」では、文章の構成や流れが適切であれば、軽微な綴りの間違いは訂正するが減点はせず、生徒が減点を恐れて書く意欲を失わないよう配慮している。

c) 採点集計の方法

採点用紙には観点ごとに得点を記入し、その得点を表計算ソフトに記録する。この作業をすることで、観点ごとの正答率グラフや正答者分布表が作成でき、教師が結果を診断的に見ることが可能になる。観点別平均点を%で表示し、以下に示す「レーダーチャート」と「得点分布図」を作成する(図4)。これによって生徒にとっても定期テストの客観的な振り返りが可能となる。

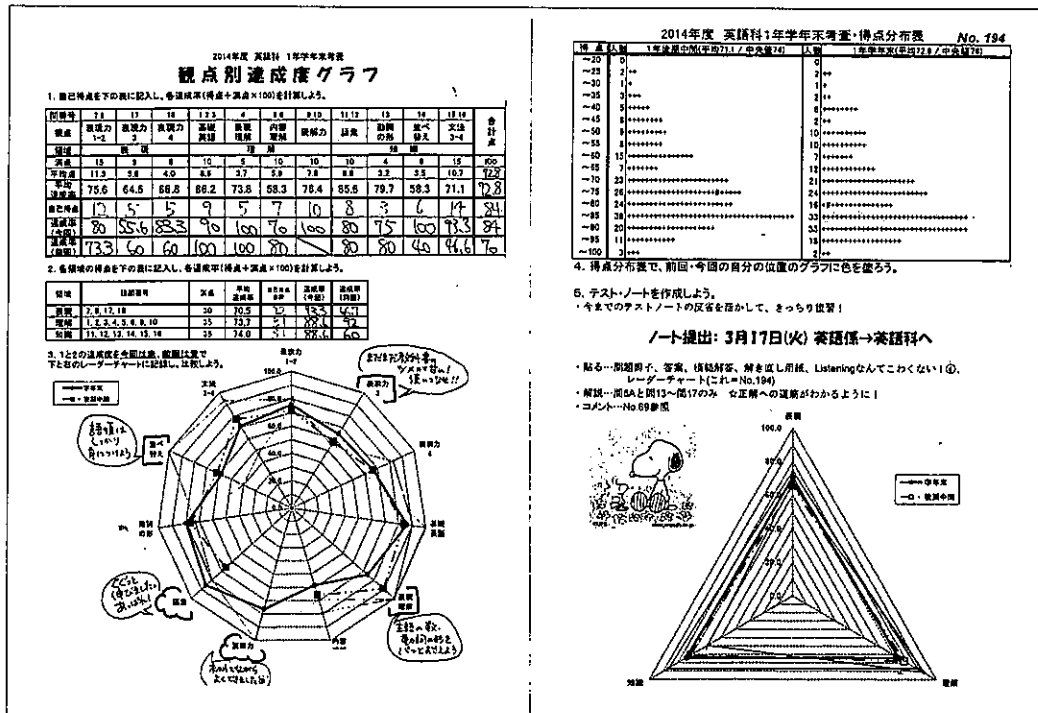


図4 定期テスト結果の診断シート

### イ) テストノート作成の指示手順

- a) 問題に再挑戦させ、自分の弱点を知り克服するための練習を開始させる  
聞き取りテストを含め問題に再挑戦させ、自分の弱点に気づかせ、苦手な部分を繰り返し練習すれば、必ず理解が深まり実力が付くことを実感させる。
- b) 「テストノート」に貼り付けて記録させる  
ノートには、問題冊子、リスニング・スクリプト、模範解答、返却された解答用紙、再実施解答用紙、観点別達成度グラフ、得点度数分布表に必要事項を記入して貼らせる。
- c) 正答や正解までの筋道を説明させる  
英語力の不十分な生徒も課題に取り組めるよう、復習で焦点を当てさせたいポイントを選び、正答までの筋道を説明する例を示す。  
例) ポイントは疑問文の作り方: Ken goes to the gym every day. [疑問文に]  
→主語は3人称のKenだから一般動詞の形はgoes。疑問文にすると、goesの裏からdoesが主語の前に出て、Does Ken go to the gym every day?となる。
- d) 取り組みを振り返り、評価するために以下の4観点からコメントを書かせる
  - ・ 普段の授業: 集中度・積極性・練習のしかた・声の大きさ・ペア練習等
  - ・ 普段の家庭学習: 毎日の復習・まとめの復習・基礎英語やその他の学習等
  - ・ テスト勉強: 内容・始める時期・週末の使い方・他教科とのバランス等
  - ・ 次回の課題や目標: 全体を振り返っての感想や今後の学習への抱負等

以上のような振り返り活動を通して、生徒は毎日の学習活動を自分のこととしてとらえ、級友を鏡とし互いに切磋琢磨する関係を築くようになる。このようにして生徒が確実な力をつけることができるように配慮しながら指導している。

### (3) オプション学習に関する指導

#### ① 『基礎英語』から発展するオプション学習

生徒には該当する学年の『基礎英語』(NHK ラジオ)聴取を課しているが、余裕のある生徒には、他学年の『基礎英語』や他の番組の聴取、さらには他の媒体の利用も勧めている。まず他学年の『基礎英語』は、下の学年ならば、良い復習・耳慣らしとしてテキストなしで聴くことができ、逆に上の学年ならば余裕のある生徒にとって良いチャレンジになる。次に他番組であるが、『基礎英語』と同様のレベルで別形式の番組がラジオにもテレビにも複数あり、テレビの場合は画面で文字情報も確認できるため、テキストなしでも利用しやすい。レベル・内容とも多岐に渡っているが、テキストやウェブサイトにはレベル別の一覧表があり、ウェブでは「英語力測定テスト」(<http://eigoryoku.nhk-book.co.jp/>)を受けて、番組選択の参考にすることもできる。

また、ウェブ上にも英語学習に関する様々なコンテンツがあり、無料のものも多いため、利用している生徒も多い。種類があまりに多いため、授業で紹介するには至っていないが、例えば生徒間で評判の高いものを、small talkや教科通信などでとりあげたりすることもできるだろう。

## ② English Roomでのオプション学習

本校では3年前から、ALT 2名の勤務日に合わせて前期は週1日、後期は週2日、それぞれ昼休みと放課後に English Room を開設し、希望する生徒が課外で英語でのコミュニケーションを楽しめるようにしている。1コマ10分または15分に分けられた予約表が English Room のドアにあり、生徒は名前を記入すれば利用できる仕組みである。1コマの人数は原則3人までの制限があり、短時間とはいえ授業よりはるかに高密度の英語コミュニケーションができるため、生徒には大変好評である。利用促進のために、授業でも生徒たちに利用を勧めているが、さらに踏みこんだ働きかけも行っている。例えば、年度始めに中3生徒200余名全員をペアにして予約をとらせ、夏休み前までに必ず一度は English Room を利用させている。一度体験すれば、楽しいと思った生徒はリピーターになり、またその様子を見た下級生たちの予約も増える。初年度は体験済みの生徒に書かせた感想を廊下にどんどん掲示して、通る生徒や教員が読めるようにしたところ、これも利用者増加に絶大な影響力があった。現在は English Room は十分に生徒間に浸透したようで、予約も順調に埋まっており、生徒の関心・意欲の高さが表れている。

## ③ Reading Clubでのオプション学習

Reading Club というのは正式な部活動の名称ではなく、英語科準備室前に置かれたブックカートの本を生徒が自由に借りられるシステムの通称である。これまでも図書室に OUP の Bookworms シリーズと Longman の Penguin Readers を全冊入れていたのだが、生徒の利用状況はあまり芳しくなかった。そこで、本が生徒の目に触れやすくなるようにと、英語科準備室の入口にブックカートを設置し、本のレベルや内容にも多様性を持たせた頃から、少しずつ利用者が増え始めた。ブックカートにしたことでそのまま教室にたくさんの本を持っていくこともできるようになり、年度始めの中2の授業で全員に本を手にとらせ、Reading Marathon と銘打って読書記録用のカードも配って読書を勧めたところ、貸出希望者が爆発的に増えた。借りに来る生徒があまりに増えて英語科準備室内に入りきれなくなったため、やむなくブックカートを廊下に出し、用紙に必要事項を記入すれば常時誰でも借りられるようにした。6月中旬の授業で、今までに読んだ本の中からお勧めの1冊を紹介し合う活動を行ったことも奏功したようで、生徒が英語読書を楽しんでいる姿が日常風景になってきた。これだけ短期間に英語読書熱が高まったことは嬉しい驚きだが、手軽に利用できる形にしたこと、選べる楽しさがあること、実際に体験させたこと、時々読む働きかけがあることなどが要因であろう。

その他の働きかけとしては、辞書指導と「私のイチオシ」がある。学習指導要領が4技能重視に戻ってから、教科書でも辞書の使い方に割かれるページが増えてきたが、やはり授業では実物を持たせて実際に情報を探させながら辞書のページをめくる体験をさせたい。本校では初めて副読本を読む中1冬の時期に辞書指導を始めることが多い。単語や熟語の意味を調べさせるだけでなく、紙の辞書と電子辞書の比較、既習語の品詞分類、様々な種類の辞書の比較なども行っている(図5、図6、図7)。自分で辞書をひけることは、自力で英語の読書を楽しむ力を伸ばすことに大きな助けとなるはずである。「私のイチオシ」は一昨年、選択授業で英語多読を選択した中3生徒たち



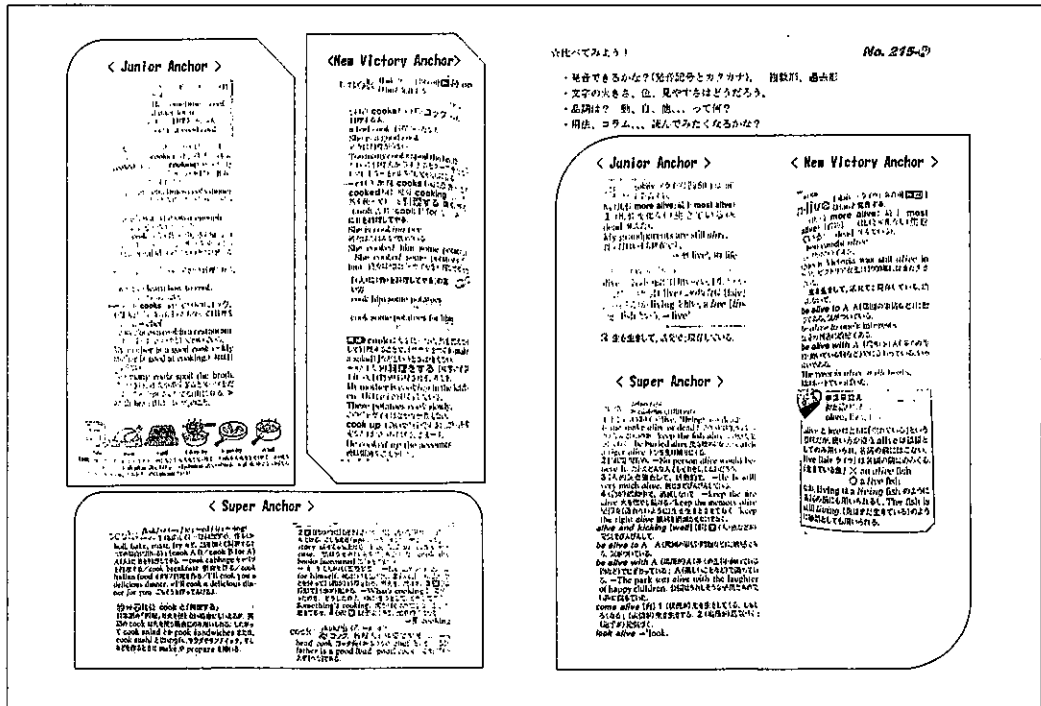


図7 様々な辞書を比較するハンドアウト

④ 長期休暇中のオプション学習

夏休みなどの長期休暇中には、毎日の学習を記録できる学習カレンダーを配付することが多いが、「基礎英語」「教科書」などの項目に加えて必ず「その他の自主学习」という欄があり、生徒たちが独自に工夫して取り組んだことならどんな小さなことでも記入してよいことになっている。ワークブックや副読本などの決まった宿題をこなすだけでなく、長期休暇中も生徒が自分の学習を自分でデザインする意識を保ってほしいからである。ここには海外へ旅行して実際に英語を使ったというスケールの大きなことから、街で見かけた英語の看板が読めたというようなほんのちょっとしたことまで、英語の歌、映画、ドラマ、舞台、本、マンガ、雑誌、新聞、ウェブ、日記などありとあらゆることが書き込まれ、生徒が様々な英語学習のアンテナを張り巡らせている様子が窺える。

4. まとめ

最近、「アクティブ・ラーニング（能動的学修）」ということばをよく耳にする。これは、平成24年8月28日に公布された中教審の報告書に示されたのが発端となって広まったものである。そこでは、アクティブ・ラーニングを「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・



ラーニングの方法である」と定義している。実は、元々これは大学の授業改善を求めて示されたものであるが、その内容を見れば、それが中学校や高等学校（もちろん小学校も）の授業運営についても言えることであることは一目瞭然であろう。

しかし、上記の定義に含まれない必要不可欠なことが英語学習には必要である。それは授業の枠を越えて主体的に英語を学習しようとする生徒の育成である。すなわち、自らの意思で授業以外の場でも英語を勉強しようとする生徒を育てることが重要だということである。それがなければ生徒に真の英語力は身につかない。さらに、英語力を身につけさえすればそれでいいのかという議論もある。英語は教科学習の1つであるが、元をたどれば「生きる力」を身につけるための学習の1つである。それは現行学習指導要領の改訂方針に示された「生徒の思考力・判断力・表現力を育成する」ことであり、その方策として「言語活動の充実」を目指すことにつながるものでもある。そして、それは生徒が自ら思考し、判断し、表現することで達成されるのであり、今回本校が提案したことはまさに生徒にその視点からの言語活動を行わせるものであると言えるであろう。

以上のことに関して、かつて本校では「自立した学習者」を育成する方法として提案したことがある（「1. はじめに」参照）。今回は、ほぼ同様のねらいを持ちながらも、かつて提案したこととは異なる視点からの指導に焦点をあてて紹介した。今回紹介した指導内容は、“最先端の” 機器や技術を使ったものでも、誰もやったことがないような“最新の” ものではない。むしろ、誰もがやったことのあるかもしれない、そして誰でもやることのできるものである。そして、上述のことからすると、誰もがやらなければならないことである。今回は、それらに対して本校における長年の実践の成果に基づいた知見を加えてみたわけであるが、本協議会に参加された（あるいは本稿を読まれた）方々が感じられたことを議論できたら幸いである。

## 参考文献

- 中央教育審議会（2012）『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）「用語集」』  
<[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf)>, アクセス日：2015-08-19
- 東京高等師範学校附属中学校（1910）『教授細目』
- 日本教育新聞（2013-11-4）「学習指導要領 全面改訂、前倒し」<<https://kodoku.kyoiku-press.co.jp/archives/929>>, アクセス日：2015-08-19
- 文部科学省（2013）「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」  
<[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/25/12/\\_icsFiles/afieldfile/2013/12/17/1342458\\_01\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/_icsFiles/afieldfile/2013/12/17/1342458_01_1.pdf)>, アクセス日：2015-08-19